

平素は格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。
FMD News Vol.32をお届けいたします。

facebook



6月のTOPICS

今月のFMD NEWSは、下部尿路症状(LUTS)とFMDに関する研究と合わせまして、泌尿器領域関連として、ED(勃起不全)や前立腺肥大症に伴う排尿障害の治療薬であるPDE5阻害薬(タダラフィル)とFMDの関連についての文献をご紹介します。

■ 尿路症状(LUTS)と血管内皮機能障害および動脈硬化との関連

2016年4月から2017年6月までの期間中に、健康診断を受診した男女434名(男性:287名 女性:147名 平均年齢:63±16歳)を対象とした横断研究において、LUTSの重症度別に、FMD、baPWVとの関連を男女別に分析した。LUTSの重症度は、国際前立腺症状スコア(IPSS)および問診(7つの症状、1つのQOLに関する質問票)により、無し(IPSS 0)、軽度(IPSS 1-7)、中等度(IPSS 8-19)、重度(IPSS 20以上)に分類した。

LUTSの重症度を無し/軽度群と中等度/重度群で分け比較した結果、男性ではFMD(2.1±2.0% vs 4.0±3.0%)、baPWV(1509±309cm/s vs 1722±386cm/s)と共に有意差(p<0.001)があったのに対し、女性では、FMDのみ中等度/重度群で有意に低く(2.3±2.6% vs 3.6±3.4% p<0.04)、baPWVでは有意差がなかった。

多変量解析の結果では、FMDは男性における中等度から重度のLUTSと独立して関連(OR:0.83 95%CI:0.72-0.95 P=0.008)していたが女性においてはその関連がなかった。また、baPWVでは男女とも中等度から重度のLUTSと独立した関連はみられなかった。

この研究では、男性におけるLUTSは、内皮機能障害と関連しており動脈硬化の初期の表現型として注目されるべきであると報告されています。

引用元: Int J Cardiol 2018 Jun 15;261:196-203

■ PDE5 阻害薬(タダラフィル)は心血管リスクの高い男性の内皮機能を改善

複数の心血管リスク因子を有するED(勃起不全)患者(男性:32名 年齢:59~71歳 平均65.4±6.3歳)を対象に、プラセボ対照二重盲検並行群間比較試験を実施。

PDE5阻害薬であるタダラフィル投与群(TDA群)とプラセボ群(PLB群)に振り分け、Baseline時、4週間後の治療終了時および6週間後(治療終了時より2週間後)にFMDを測定した。

TDA群におけるFMDは、Baseline時(4.2±3.2%)と比較して4週間後(9.3±3.7%)および6週間後(9.1±3.9%)で有意に改善(p<0.01)したが、4週間後と6週間後のFMDに有意差はなかった。PLB群のFMDは、それぞれに有意差は認められなかった。

この研究では、タダラフィルによる投薬治療は、EDの程度に関わらず心血管リスクの高い男性の内皮機能を改善する効果があり、利点として治療を停止しても一定期間、その効果が持続されることであると報告されています。

引用元: Eur Urol. 2005 Feb;47(2):214-20